

7 十九首塚考

筆者 中村 房男

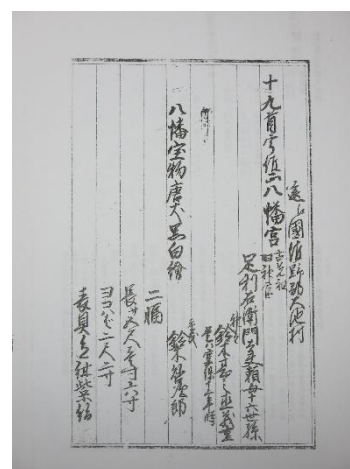
掛川城下の西はずれ、逆川に接した十九首町は平将門を祀る十九首塚で知られている。将門伝承で育まれた町である。十九首町の地名が記述された最も古い文献は、慶長9年(1604年)伊奈忠次による遠江検地帳である。十九首町と言う奇異な地名には奥浜名湖を拠点にした古代の名門氏族「井伊家」と深い関わりのある史実は知られていない。掛川と井伊家の関わりは440年前(永禄5年・1563年)に掛川で起きた井伊家の不幸な出来事から始まる。出来事を記述した文献は松平家忠(家忠日記)と孫の忠冬(家忠日記増補追加)の年代が最も早い。これ等の記述を補った文献は「鈴木家文書」である。以下は掛川で起きた不幸な出来事を記述した文献である。



※ 家忠日記(松平家忠)・1575－1594 年	十九首記述無し
※ 家忠日記増補追加(松平忠冬)・1665 年	十九首記述無し
寛永諸家系図伝・1641 年	公文書
藩幹譜・1702 年	公文書
※ 鈴木家文書・1727 年	十九首記述
井伊家伝記・1730 年	十九首記述無し
寛政重修諸家譜・1,800 年	公文書
礎石伝・1844 年	十九首記述
井伊家遠州浜川村古跡事・江戸時代	十九首記述
笠間藩資料・礎石集・1756 年	十九首記述

「鈴木文書」について

鈴木家文書は遠江国佐野郡大池村(現掛川市大池上屋敷)に鎮座する「十九首宇佐正八幡宮」の社家に伝わる文書である。享保十二年三月十五日記述(1727年)神主鈴木甚之丞義重の「十九首宇佐正八幡往来書」と寛政三年～天保年間(1791～1832年)の神主鈴木靱負による「鈴木家年代記」、及び神主鈴木甚蔵の「天王・八幡両社領地訴訟之一件」弘化二年(1845年)である。本稿は鈴木家文書を主に活用した。



掛川で起きた井伊家の不幸な出来事

井伊家伝記・礎石伝・藩翰譜・寛永諸家系図伝・寛政重修諸家譜第十二、等に井伊直親主従の顛末の記述がある。これらの書かれた時期から判断して一級の文献資料である家忠日記

(松平家忠)に基づき、1665年(寛文五年)、松平忠冬(家忠の孫)が編纂した「家忠日記増補追加」からの引用が考えられる。臨場感のある記述である。

「・・・井伊直親駿府に往て、逆意なきの旨を氏真に達せんと浴して、井伊の谷を出て駿府に赴く、多勢は其聞こえに憚りあるに依て、主従二十余人を卒して懸川の城下を過る、朝比奈備中守是を聞て、直親遮て軍を駿府に発す、幸我城下を通るの敵を射留めされば、後難遁る所なしと謂て、懸川の城より軍士数百騎を発して直親を囲て、急に攻撃つ、直親術尽くし奮戦と云えども、朝比奈が猛勢争ひ攻るの間、直親遂に囲中に戦死す・・・」(家忠日記増補追加) まさに、朝比奈備中守による虐殺である。朝比奈備中守の意図は、今川家に対する「付度」と、家忠日記は匂わしている。

井伊直虎の許婚、後の徳川四天王の一人井伊直政の父である直親は井伊家の家老小野但馬守の讒言の申し開きの為、駿府の今川氏真のもとに赴く途中、懸川城下で懸川城主朝比奈氏の奇襲に会い懸川の西外れで殺害された。しかし、殺害された具体的な場所の記述がない。古文書によって殺害された日は永禄五年(1563年)十二月十四日「井伊家伝記・井伊家遠州渋川村古跡事より」・永禄五年三月二日(1562年)「異本塔寺長帖より・静岡県史資料編」の違いはあるが各古文書に顛末記が書かれている。

1844年(天保十五年)、二宮神社神主中井直怒による「礎石伝」には・・・直親公討死之場所は掛川西入口にて合戦相始り申候也。則十九人の首を朝比奈方へ取候由、依之今討死之所を十九首町ト古老申候。俗二十九首丁ト計り申候。・・・と鈴木家文書と類似の記述がある。

鈴木家文書による十九首宇佐正八幡宮創建の背景

1727年(享保十二年)、神主鈴木甚之丞義重・義久の「十九首宇佐正八幡往来書」に井伊直親主従殺害の記述がある。家忠日記同様の臨場感ある記述である。

・・・後世に伝える為に真実を記そうと思う。この宮は太古誰が創建したのか
またどれ程の年月が経ったのかは判らないが、里人の言い伝えでは「昔、天下の乱れた時に井伊政氏(井伊直親の間違いか)がこの地で弓馬の変に逢い逃れることが出来ず、十九人の家臣と共に亡くなったのでこの地に八幡宮を建てた」と祖父から聞いている。ただ悔しい事に、年月が経ってその真実は判らなくなっている。然し、此処の町の町名は家臣十九人の首を言っていることに間違いは無い・・・(鈴木家文書)

1601年(慶長六年)、伊奈備中守(伊奈忠次)は十九首町東光寺敷地内の十九首宇佐正八幡宮に三石の黒印を与えている。1604年(慶長九年)、伊奈忠次が行った遠州総検地下股村検地帖絵図に「十九首町」の記述がある。(静岡県史資料編10、付録)

400年前には十九首町東光寺敷地内に十九首宇佐正八幡宮は存在していたと思われる。

十九首宇佐正八幡宮の遷座

鈴木家文書・年代記に1692年(元禄五年)、十九首町東光寺敷地内に在った宮を風光明媚な上屋敷二つ池「地崎の山」現在地に遷座の記述がある。1708年(宝永三年)説もあるが井伊家が46年間掛川城主を勤めていた時である。

井伊直好・(井伊直勝長男)三河西尾城主 万治二年(1659年)～寛文十二年(1672年)

※ 井伊直勝(井伊直政長男)・隠居同行

井伊直武・(井伊直好長男) 寛文十二年(1672年)～元禄7年(1694年)

井伊直朝・(井伊直武長男) 元禄7年(1694年)～宝永元年(1705年)

井伊直矩。宝永二年(1705年)



藩主井伊直好は井伊直政(徳川四天王・彦根城初代城主・井伊家中興の祖)の孫であり、井伊直親の曾孫である。直親の無念を強く感じていたことは容易に想像できる。因縁の地掛川の南に高天神城が在り、その東、新野の里は井伊家の家老新野左馬助の居城と伝承される舟ヶ谷城が在る。直虎の母親祐椿尼(左馬助妹)の実家である。井伊家は初代彦根城主、井伊直政の長男親子を掛川の地に送り込んだ意図は因縁の地、掛川に井伊家を根付かせたかったのではないか(リョウタン寺住職 武藤全祐氏談)。

井伊家の黒印は不明であるが鈴木家文書に弘化二年(1845年)牛頭天王神主(現・池辺神社)後藤市衛門が十九首宇佐正八幡宮神主鈴木甚蔵に訴訟を起こした記述中に、井伊兵部少輔(井伊直朝)が宝永二年(1705年)両社に三石の「御除地」を与えている。慶長六年遠州総検地時に伊奈忠次が両社に三石の黒印を発給しているが引き継がれていたと思われる。遷座の時期から井伊家の関与は確かであろう。騒乱の地十九首に葬られていた祖祖父直親主従を風光明媚な「地崎の山」現二つ池に遷座した理由は、二つ池を井伊家の故郷浜名湖に見立て御霊を祀ったと思われる。宮は西を向いて建っている。併し、不可解な事がある。遷座に井伊家の関与を示す明確な記録が見当たらない。そして、十九首宇佐正八幡宮往来書に平将門を祀る記述である。将門伝承の出現は掛川市に於ける初現と思われる。井伊直親主従を祀った宮が平将門を祀る宮に代わっていた。宇佐正八幡宮往来書を書き残した神主、鈴木甚之丞義重の真意は不明である。

十九首町に伝わる「将門伝承」について掛川藩最後の城主、太田公が作った「掛川誌稿」は、附会の俗説と記述している。江戸時代、全国に広がりを見せた「将門民間信仰」が地元に着し残ったものと思われる。

古代奥浜名湖の地は陸路と海路の古代交通の結節点であった。発掘調査による出土遺物から開発が進んでいたことがわかる。姫街道(ひね街道、古い道が転じたものか)は今に残る。井伊家は北遠の地に古代(天白磐座遺跡。西暦400年前後)から興った豪族である。律令期には御厨(祝田遺跡)を持つ井伊ノ国になり、中世南北朝時代には後醍醐天皇の皇子宗良親王

を擁護して共に北朝と戦い、戦国時代には駿河今川家の遠江支配に抗った一族である。今川家に従属したものの迫害は続いた。

慶応四年(1868年)二月晦日、有栖川宮タル仁親王(1835－1895年)が東征(戊辰戦争)の節、掛川宿に御宿泊し三月三日まで滞在。この時、十九首宇佐正八幡宮へご参拝になった。鳥居先で御下馬、拝殿に進まれて「十九首八幡」と仰せられて御参拝されたとの記述がある(鈴木家文書)。これについても十九首宇佐正八幡宮が平将門を祀る宮でないことがわかる。平将門は朝敵である。有栖川宮がその様な宮を参拝するとは思えない。有栖川宮は後醍醐天皇の皇子宗良親王を庇護し、共に北朝と戦った井伊家の宮であることを知っていたと思われる。

結語

十九首宇佐正八幡宮に将門伝承が出現したのは遷座段階と思われる。将門伝承出現に至った背景は「井伊家の事情」によるものであろう。遷座に井伊家の関与を示す記録が見当たらない以上推測しかないが国学者の関与が考えられる。

国学は江戸時代中期、真言宗の僧契沖(1640年)を祖として興った学問で急速に全国に広がった。遠州は賀茂真淵を輩出し本居宣長を初めとして優秀な弟子が多く、遠州の国学は知名度が高い。国学四大人(四大家)の一人、平田篤胤は出自を平将門の末裔としていた。

将門伝承は関東を中心に列島各地にあり、静岡県下では掛川市だけである。古来、平将門、菅原道真は怨霊神として恐れられていたが、江戸時代には菅原道真は学問の神様「天神様」になり、平将門は「世直しの神」であった。民衆の側に立って行動を起したその姿勢に共感し、反骨精神のシンボルとして「民間信仰の神様」になり、急速に各地に祀られ、武家社会にも受け入れられていた。芝居や物語で将門の文芸化が進んだ。遠州地域は国学の文化的影響が強く

1868年(明治一年)神仏習合分離をさせたのも遠州国学であると言われている。国学発祥の地は東京神田で、平将門を祀る神田明神社の敷地内に石碑があり示唆的である。

参考文献

十九首宇佐正八幡宮由来(鈴木家文書) 平成23年 浜松北部公民館古文書同好会

井伊家伝記 享保十五年(1730年)・龍タン寺祖山和尚

井伊家遠州渋川村古跡事 (江戸時代)

礎石伝 天保十五年(1844年)・二宮神社神主中井直怒

藩翰譜 元禄十五年(1702年)・新井白石

寛永諸家系図伝 寛永十八年(1641年)

寛政重修諸家譜 (1790－1800年)・文化9年(1812年)

家忠日記 天正五年－文禄三年(1575－1594年)・松平家忠

家忠日記増補追加 寛文五年(1665年)・松平忠冬
慶長九年遠江検地帳 慶長九年(1604年)・伊奈忠次
静岡県史資料編7 ・ 静岡県史編纂委員会
静岡県史資料編10・付録 (1990年)・静岡県史編纂委員会
将門記1・2 (1975－6年)・梶原正昭 平凡社
平将門伝説 (2001) 村上春樹 汲古書店
遠江古跡図会 享和三年(1803年)・兵藤庄衛門
掛川誌稿 文化二年(1805年)・掛川藩主太田資順
掛川史誌 掛川教育委員会
掛川市史 掛川教育委員会
引佐町史 引佐町教育委員会
聞訟礎石集・笠間藩資料 (1990年)・茨城県笠間市史編纂委員会
井の国千年物語 2005年 引佐町教育委員会
浅羽町史 浅羽町教育委員会
須永敬 神功皇后と母神を祀る信仰
ー東アジアの聖母と香椎宮ー
遠州国風土記・寛政十一年(1799年) 内山真龍
大池村変革誌 大正四年
和光山永江院開創五百年記念誌 (1988年)
東光寺沿革史 昭和35年